

広
報

にしお
NISHIO

少し未来あきの、話をしよう

特集

「縁起でもない話」の先に



特集

「縁起でもない話」の先に



【意味】将来の変化に備え、
将来の医療及びケアについて、本人を主体にその家族
や近い人、医療・ケアチ
ームが、繰り返し話し合い
を行い、本人による意思決
定を支援するプロセス

【ACCP】

アドバンス・ケア・プランニ
ング (Advance C
are Plannin
g) / 人生会議

人生会議

Advance Care Planning

未来のことは分からないから

「死」を語る

「自分が死んでしまったら」そんなことを誰かと話したことはありますか。

多くの場合「そんな不吉な、縁起でもないことをいうものではない」と一蹴されてしまう、腫れ物のように扱われる話題。

しかし、未来のことは誰にも分かりません。その不吉な、縁起でもない未来はすぐにやってくるかもしれないのです。

敬遠されている「死」を語ることで、自分自身や周囲の人の未来をイメージすること。いつやってくるか分からないからこそ、今のうちに語り合い、想像しておく必要があります。

納得できる最期を

人生会議は自分の意識がはっきりしているうちに、人生の最終段階での希望を、家族や友人、医療従事者などと話し合い、想像し、共有しておくことです。自分の心臓が停止したときに蘇

生処置を望むのか、どんな場所で最期を迎えたいかなど、その時の気持ちや状況を想像しながら話し合っておきます。そうすることで、いざというときに本人も家族も、みんなが納得でき、心残りの少ない最期を迎えられるようになるのです。

早すぎることはない

多くの人は、最期のときを自宅で過ごしたいと考えることでしよう。しかし、現実的な問題として、その希望を実現するために解決しなければならぬ課題があることも珍しくありません。最期のときを迎える自分は一人で歩けるのか、食事は一人でできるのか、一緒に暮らす家族はどうなっているのか…。あらゆる可能性を考え始めたら切りがありません。それでも、中には早いうちから備えておけば解決できる課題もあります。人生会議を行うのに早すぎるということはないのです。

ACPの本質は「対話の繰り返し」

5年ほど前からACPを診療に取り入れています。初めのうちは、余命が残り少ない患者に、「はい」や「いいえ」で答えられるような決まった質問への回答を書いてもらうだけでしたが、ある時「これで患者の本当の思いを聞いているのか」と思い直し、改めて自身の取り組みを見つめ直しました。私が出した結論は「ACPは患者や家族、医療従事者が対話を繰り返すことが本質」ということ。その後は、患者が今の思いを語れるよう「どう思うか、どう考えるか」と質問し、対話を繰り返すようにしました。その結果、看取りをした患者の家族から、納得できる最期だったと感謝されることが増えました。



ACPへの理解を広め、死を語ることへの抵抗感を減らすため、地域の小学校へ出向いて「いのちの授業」を行う。



神谷内科整形外科 神谷 仁孝 医師

いのちの授業

Class of the Life



寝たきりなら、外が見える部屋が良いんじゃない？



6 月に一色中部小学校で行われた「いのちの授業」の一幕。子どもたちは、有名な漫画の登場人物をモデルにして、ACPを考えました。年老いた父が余命宣告を受け、同居しているのは持病を抱えた母。離れて暮らしている息子が自分だとして、自分に何ができるか、母に介護はできるのか、父は残された時間をどこでどのように過ごすのが良いのか。それぞれが真剣に考え、意見を交わしました。

「自分の仕事もあるし、毎日実家に通うのは難しいのかもしれない」「お母さんだけでお父さんをお風呂に入れられないよね。答えがある問題ではありませんが、子どもたちはできる限りの想像力を働かせ、議論を重ねました。」

家族愛を感じるきっかけに

「いのちの授業」では人生会議だけでなく、在宅医療や介護の問題も学びます。子どもたちが、コロナ禍でも問題になった在宅医療などを考えることに繋がる、とても価値のある授業です。この授業には地域で医療や介護に従事し、日々、命と向き合っている方々が進行役として参加します。そのような方々の言葉には重みがあり、子どもたちの貴重な学びに繋がっています。

授業を通して、子どもたちには「家族の絆」を学んでほしいと思っています。近年の家族構成は大多数が核家族。人数が少ないからこそ、いざというときに家族で助け合うことが必要です。そのためにも「家族が病気になったら、介護が必要になったら」と想像し、語り合う中で、家族への思いやりや家族の愛を感じてほしいです。



一色中部小学校 河合 厚志 校長

もし、ママがあと少しで死んじゃうとしたらどうする？



「いのちの授業」で出た宿題は「大事な人が余命宣告をされたら」を家族で話し合うこと。普段なら避ける話題を真剣に話し合うことは、それぞれがどんな思いを持っているか知ることにつながります。

6年生の今川理央さんは、家に帰ると早速、父・裕規さん、母・みつ子さんと話し合いを始めました。初めのうちは戸惑いもありましたが、少しずつ、それぞれの思いが口に出始めます。

「お姉ちゃんと相談する」。普段はけんかが絶えない姉と相談するという思いがけない言葉が理央さんから出ると、みつ子さんは「少し驚いた。でもそれ以上にうれし」と目を潤ませました。裕規さんは「自分の死を身近に感じた気がする。家族のためにも元気で長生きしなければ」と決意を口にしました。

家族に何かあったらという、決して明るい話題でないにも関わらず、話し終えた家族から、未来への希望が語られる。「縁起でもない話」の先には、温かな家族の愛がありました。

家族の希望をかなえたい

パパやママが病気になったり、死んじゃったりしたときのことを家族で話したことは初めて。パパもママも最後を迎えるなら「家がいい」って言っていたので、できればそうしてあげたい。難しいかもしれないけど、何とかして家にお医者さんとかを呼んで、パパやママの希望をかなえてあげたいです。



今川 理央 さん

きっと家族で助け合える

最期のときを考えることは敬遠されるし、逃げたくなる話題。今回、家族で話し合ってみて、自身の死について少し現実感が出てきたような気がします。娘から「お姉ちゃんと相談する」と予想外の言葉が出たことに驚きもあり、うれしさもあり。きっと何かあっても家族で助け合えると安心感を覚えました。



今川 裕規 さん みつ子 さん